

# 遅れて来たおたまじやくし

—— 雑誌『婦人と子ども』の中の楽譜 ——

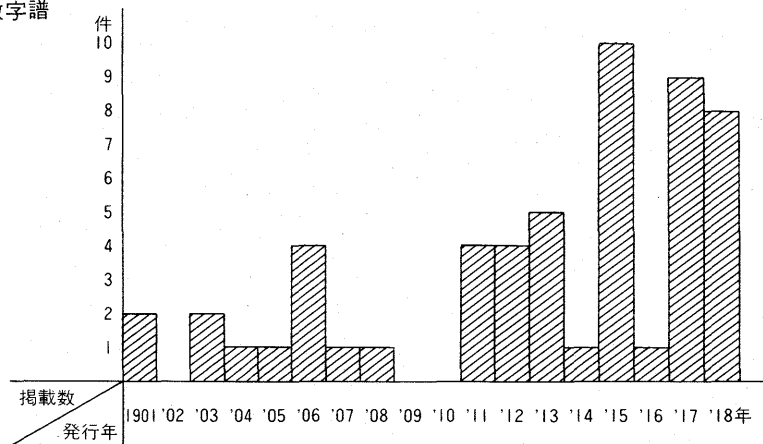
伊吹山眞帆子

『幼児の教育』の前身である『婦人と子ども』創刊号には、「各地に於ける婦人教育幼児保育の状態、婦人問題、婦人児童の遊戯、手毬歌、子守歌等に付きては詳細なる報告を望む」という広告が載っている。読者は身のまわりに報告したい歌や遊戯曲があったとしたら、どのように表わして寄稿したのだろうか。音楽を可視的に書き表わす方法を記譜法と呼び、文字、数字、その他の記号や線を使った様々な

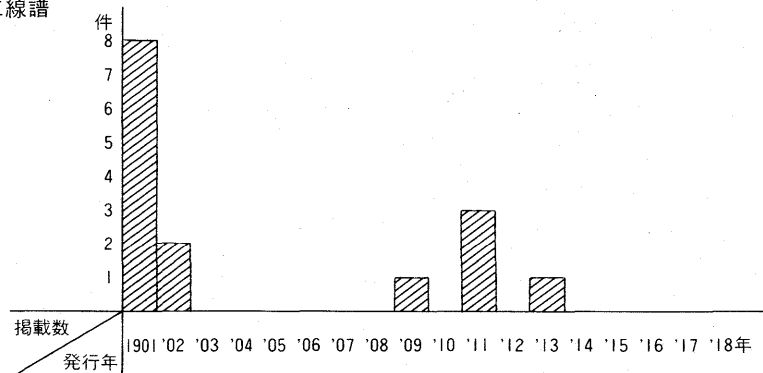
記譜が存在する。たとえば、ネウマ譜、奏法譜、文字譜、譜線譜、箏・三味線・尺八・雅楽・声明・謡の記譜などである。『婦人と子ども』全十八巻（一九〇一年～一九一八年）には数字譜、五線譜それぞれに雅楽譜の三種類の記譜法による楽譜が掲載されている。縦軸に楽譜の掲載数を、横軸に発行年をとると表1のようになる。各記譜法の内容を年を追って見ていくことにしよう。

表1 各記譜法による楽譜掲載数（年次別）

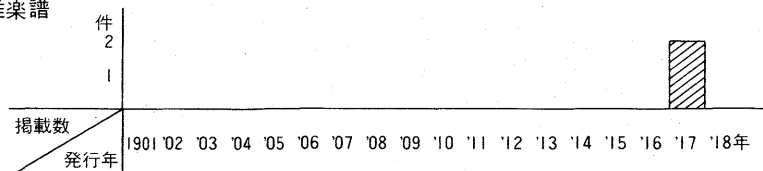
数字譜



五線譜



雅楽譜



(一) 数字譜

音楽教材を身辺の遊び歌から採集しようとする姿勢の窺える冒頭の広告に対して、全国各地からその地方に伝わる子守歌や遊び歌が寄せられた(表2)。楽譜で書かれているのは『鳥取の俗謠』(『婦人と子ども』第一巻三号、以下巻号のみ記す)『中の中の小佛』(第一巻六号)『新宮の七夕の歌』(第一巻七号)それに『東京の手鞠歌』(第五巻五号)の四曲で、すべて数字譜となっている(譜例1)。

また、幼稚園で実際に使用した曲『お月様と虫』(譜例2)以下十曲、京阪神連合保育会で使用した唱歌や遊戯曲『子どもと犬』(譜例3)以下二十九曲すべて数字譜で表わされている。

オースティン (Oesten, Theodor 一八一三—一八七〇) ドイツの作曲家) のピアノ曲『人形の夢と目覚め』でさえ数字譜に翻訳された形で載っている(譜例4)。

鳥取の俗謠

鳥取 永井幸次寄

$\frac{3}{4}$	<b>3</b>		<u>5.5</u> <u>5.5</u>		<u>5.5</u> <u>5.5</u>		<u>6.5</u> <u>3.3</u>		<b>3 0</b>		
	ユ		キヤコン		コン		アラ		レヤコン	コン	
			<u>3.3</u> <u>6.6</u>		<u>5.6</u>	5		<u>5.5</u> <u>6.5</u>		<u>6.5</u> <u>3 0</u>	
			ダイ		セン	ヤマ		ニ		ユキコロ	コロヤ

▲譜例1 数字譜で載せられた俗謠(第1巻3号)

表2 各地から寄せられた子守歌や遊び歌

盛岡	お手玉歌 手毬歌 子守歌
武蔵	俗謡
東京	手鞠歌
上総	羽つき歌・子守歌
相模	手毬歌・子守歌
富士山麓	手毬歌・子守歌
越後	俗謡
越中	俗謡
加賀	俗謡
信濃	童謡・手毬歌
駿河	子守歌
三河	手毬歌
伊勢	童謡
紀州	七夕歌・手毬歌
浪花	子守歌
豫州	手毬歌
鳥取	童謡・俗謡
備後	手毬歌・子守歌

(二) 五線譜

第一巻および第二巻には多梅稚、吉田信太らの作品が十曲、五線譜で表記されている(譜例5)。これらは掲載の影絵遊びや物語、季節にふさわしいものとして選曲されたようである。しかし第三巻以降

になると、五線譜による曲はほとんど載せられていない。かろうじて『幼稚園保姆合唱の歌』(第九巻四号)、フレール会夏期講習会使用の三曲(第十巻八号)、『ゴルドン美学講話』の中の譜例(第十巻四号、七号)のみである。

お月様と虫

ニ調

久留島武彦

$\frac{4}{4}$  1 1 3 5 5 | 6 6·5 0 | 6 5 3 1 | 3 2 2 0 ||

ナツキサマ マルク オヤネサ デレバ  
その1はの うらで そのつゆ すうて

1. 3 5 5 | 6. 5 i0 || : i. 6 5 1 | 3. 2 10 ||

クサバニ ツユガ キラキラ ヒカル  
かはいい むしが うたうよ うたう

▲譜例2 幼稚園で実際に使用された曲の数字譜 (第12巻11号)

へ調二拍子

子供と犬

|  $\frac{1}{\text{ボ}}$   $\frac{1}{\text{オ}}$   $\frac{2}{\text{ク}}$   $\frac{3}{\text{ノ}}$  |  $\frac{2}{\text{カ}}$   $\frac{2}{\text{ハ}}$   $\frac{2}{\text{イ}}$   $\frac{2}{\text{ー}}$  |  $\frac{3}{\text{コ}}$   $\frac{3}{\text{ノ}}$   $\frac{5}{\text{ジ}}$   $\frac{5}{\text{ョ}}$  | 2 0 |  
おもたい けれどー おんぶした ち

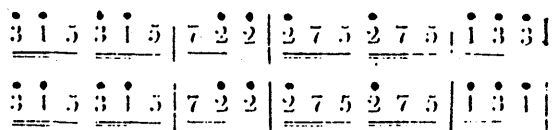
|  $\frac{3}{\text{ワ}}$   $\frac{1}{\text{ン}}$   $\frac{3}{\text{ワ}}$   $\frac{1}{\text{ン}}$  |  $\frac{1}{\text{ワ}}$   $\frac{6}{\text{ン}}$   $\frac{6}{\text{ト}}$   $\frac{5}{\text{ー}}$  |  $\frac{1}{\text{ア}}$   $\frac{1}{\text{マ}}$   $\frac{3}{\text{エ}}$   $\frac{2}{\text{ツ}}$  | 2 0 |  
すやすや すやとー おとなし う

| 3  $\frac{3}{\text{ク}}$   $\frac{3}{\text{ノ}}$  |  $\frac{3}{\text{カ}}$   $\frac{5}{\text{ラ}}$   $\frac{3}{\text{ガ}}$   $\frac{2}{\text{ニ}}$  |  $\frac{1}{\text{ト}}$   $\frac{2}{\text{ビ}}$   $\frac{1}{\text{ア}}$   $\frac{1}{\text{ガ}}$  | 5 0 |  
ぼく の おせなで れんれした

|  $\frac{6}{\text{シ}}$   $\frac{6}{\text{ョ}}$   $\frac{6}{\text{ン}}$  |  $\frac{1}{\text{ホ}}$   $\frac{1}{\text{ン}}$   $\frac{1}{\text{ト}}$   $\frac{1}{\text{ニ}}$  |  $\frac{3}{\text{カ}}$   $\frac{1}{\text{ハ}}$   $\frac{6}{\text{イ}}$   $\frac{5}{\text{ー}}$  | 1 0 |  
ションは ほんとに かはいー な

▲譜例3 京阪神連合保育会で使用された曲の数字譜 (第13巻7号)

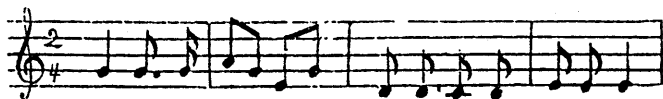
人形の夢と目覚め 遊戯曲『九鳥捕へ』より



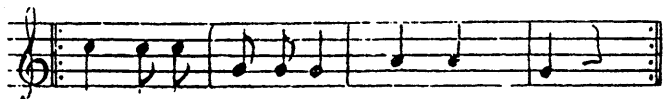
▲譜例 4 数字譜に翻訳されたピアノ曲 (第18巻 8号)

とんぼ

吉田信太作曲

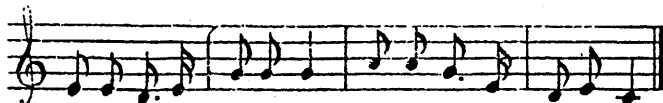


ト ン ボ ヨ ト ー ン ボ シ ナ カ ラ ト ン ボ



ト ン テ ト ー ク ヨ リ ナ

ト ノ ト コ ニ ト ヴ レ



ヒ ナ タ ヲ ア ツ イ リ カ ゲ テ ヲ ス メ

▲譜例 5 五線譜で表わされた数少ない例の一つ (第1巻 8号)

JASRAC 出9512448-501

風 車

カ。ザ。ー。グ。ー。ル。ー。マ。○  
 徴。○。徴。○。角。○。商。○  
 カ。ー。ゼ。ー。ノ。マ。ー。ニ。ー  
 商。○。角。○。徴。○。角。○。商。○  
 ー。マ。ー。ニ。○。メ。ー。グ。ー。ル。ー  
 宮。○<sup>嬰羽</sup>。宮。○。商。○。商。○。角。○  
 ー。ナ。ー。リ。○。ヤ。ー。マ。ー。ズ。ー  
 角。○。徴。○<sup>宮</sup>。嬰。羽。○。嬰。羽。○<sup>宮</sup>。宮。○  
 ー。メ。ー。グ。ー。ル。ー。モ。○。ヤ。ー  
 嬰。羽。○。宮。○。徴。○<sup>百</sup>。角。○。商。○  
 ー。マ。ー。ズ。メ。ー。グ。ー。ル。ー  
 角。○。角。○。徴。○。角。○。宮。○  
 ー。モ。○  
 宮。○<sup>百</sup>

▲譜例 6 雅楽譜で表された「風車」(第17巻10号)

ね ず み

5	1 5 1 3	1 5	1 5	1 5
・	ネ ズ ミ ガ	カ ガ ル	カ ガ ル	カ ガ ル

1 5 1 3	1 5	6 7	1
ネ ズ ミ ガ	カ ガ ル	カ ジ	ヲ

▲譜例 7 五線譜と数字譜が併用された楽譜 (第15巻10号)

(三) 雅楽譜

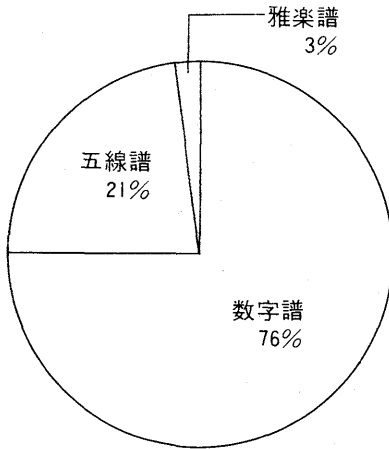
『私立幼稚園の発達』という題の記事(第十七巻十号)の中に、芝麻布共立幼稚園の田中房子園長は明治二十年頃を回想して、雅楽譜による『風車』と『家鳩』を挙げている(譜例6)。明治九年、東京女子高等師範学校附属幼稚園開園に際し、式部寮伶人数名と附属幼稚園保母たちで共同制作した『保育唱歌』からの二曲である。

『婦人と子ども』には以上述べた三種類の記譜法で楽譜が掲載されているが、主に数字譜と五線譜の二種で占められ、そして数字譜によるものの方が五線譜よりはるかに多い(表3)。

幼稚園での使用曲、保育集会で披露した遊戯曲、住んでいる土地の遊び歌、そういった音楽を紹介したいとき、記譜法として主に数字譜が採用されていた。特別な専門家でない限り、当時の人たちが曲を

書き表わすときにはおおかた数字譜によったことがわかる。その頃の唱歌のような単旋律を表わすには数字譜で十分な場合が多かった。第十五巻には五線譜と数字譜を併用している楽譜も載っている(譜例7)。五線存在を知っていて、音の長さの分割に

表3 各記譜法の割合





は五線の小節を使っても、音高を示すには音符ではなく数字の方を使っている。このようなジレンマがそれほど昔ではなく、ただか八十年ほど前の保育者に見られた。オースティンの『人形の夢と目覚め』のように、西洋音楽を数字譜に置き換える必要があったことを示す例もある。

明治・大正の音楽文献には五線譜で書かれているものが多く、『幼稚園唱歌集』（文部省音楽取調掛編纂一八八七年）も滝廉太郎や山田耕筰の作品もそう



であった。教科書や作曲家のレヴェルではそうだったのだろう。しかし、家庭や幼稚園では必ずしもそうではなかった。数字譜の方がコミュニケーションの手段として、また、唱歌や遊戯曲の記譜として優勢だったことを『婦人と子ども』の中の楽譜が示している。

『婦人と子ども』の最終巻ともなると、数字譜から五線譜への移行を暗示する記事も見られる。『リズムについて』と題する記事や唱歌から独立した伴奏曲（前出オースティン作曲『人形の夢と目覚め』）の出現である。しかしそれらはかすかな徴候であって、記譜法にはまだ反映されていなかった。『婦人と子ども』を読む限り保育の現場ではおたまじゃくしはもっと遅れてやって来たのだった。

（お茶の水女子大学女性文化研究センター）